

ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第23節～第24節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

2016-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012754>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第23節～第24節の解明

山口 誠 一

凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 『精神現象学』第二版刊行に際し推敲された第一版表記は、本論稿原文直下に表示した。

《第23節》

【要旨】

命題では絶対者が主体の表象主語である場合がある。しかし、命題では主体は叙述されない。主語「神」は名前にすぎない。述定によって主語は現実的知になる。また、純粹概念には意味のない音は本来不要である。しかるに「神」は主体表象の音にすぎない。命題形式における固定主語と述語の関係も外的である。述定運動は命題内容を主体として叙述する。知る主観の運動は命題内容そのものに属さない。述定運動も命題内容に属していない。Subjektは主体でもあり主語でもある。主体は静止した点ではなくて自己運動である。

(1) 命題では絶対者が主体の表象主語である場合がある。

Das Bedürfnis, das Absolute als *Subjekt* vorzustellen, bediente sich der Sätze: *Gott ist das Ewige, oder die moralische Weltordnung, oder die Liebe* u.s.f.

絶対者を主体として表象しようとする要求のために、「神は永遠である」とか、「神は道徳的世界秩序である」とか、「神は愛である」といったような命題が用いられてきた。

《註解》ここで、神についての命題が、絶対者を主体として表象しようとする要求のために用いられてきたとのべられている。神は絶対者の表象であり、この絶対者としての主語の本質が述語で表明されると主体が表象されるとされているわけである。こうして、主体としての絶対者は、ドイツ観念論をはじめとするヘーゲルと同時代の思想の要求でもあることが明言されている。また、神という主語を述定する永遠、道徳的秩序そして愛は、特定の哲学に対応するわけでもない。たとえば、愛としての神は、フィヒテにもシェリングにもそしてロマン主義にもあてはまる。

(2) しかし、命題では主体は叙述されない。

In solchen Sätzen ist das Wahre nur geradezu als Subjekt gesetzt, nicht aber als die Bewegung des sich in sich selbst Reflektierens dargestellt.

そうした命題にあっては、真なるものが、主語の位置にまさにいきなりおかれてはいるが、ただそれだけであって自己自身へ還帰する運動として叙述されてはいない。

《註解》ここで「自己自身へ還帰する運動」といわれているのは哲学体系の叙述のことである。《第60節》では、自己とは概念であるといわれ、《第62節》では、「内容の主体」という表現もある。この主体こそが「真なるもの」なのである。

(3) 主語「神」は名前にすぎない。

Es wird in einem Satze der Art mit dem Worte „Gott“ angefangen. Dies für sich ist ein sinnloser Laut, ein bloßer Name;

このたぐいの命題では「神」という言葉ではじめられる。この言葉は、それだけでは意味のない音であり、たんなる名前にすぎない。

《註解》神という言葉が名前にすぎないことについては、『精神現象学』《第66節》でさらに詳しく説明されている。ただし、ベルリン期の『エンツュクロペディー』では、『精神現象学』とは異なっていて、ライオンという言葉を事例として、言葉を思考することによって、意味が理解されるのではなくて事象が理解されることになる。そして、この事象が心理学的に説明されているのが、『エンツュクロペディー』「知性」とりわけ「記憶」の箇所である。そこでは、カントの認識能力論から当時の連合心理学への展開をヘーゲルが独自にとらえている。「知性の体系化のなかで記憶の地位と意義をとらえ、記憶と思考が有機的に連関し合っているのを概念的に理解することは、精神論において、いままでまったく注目されなかった点の一つであり、また実際もっとも困難な点の一つである」(GW20, § 464, Anm.)とされている。そして、知性の対象は、直観、表象、思想そして純粹思想としての概念というように段階的にとらえられている。表象の段階でとりわけ記憶は、想起とは区別されていて、「表象作用一般としての知性が最初の直接的直観に対して行う想起作用の諸活動と同じ諸活動を、言葉という直観に対して行う」(GW20, § 461)とされる。記憶は、①名前を保持する記憶形態、②再生産的記憶形態そして③機械的記憶形態の三段階を経て思考に変化する。

①名前を保持する記憶形態では、名前という直観と名前の意味の結合としての記号が想起内面化によって、個別的ではなくて普遍的・持続的になる。そして、「この普遍的・持続的結合によって名前と意味とが知性に対して客観的に結合されている」(GW20, § 461)。ここで、名前という直観は表象を表現することによって、事象となる。事象的とは客観的ということなのである。なるほど意味と記号とが同一となり、一つの表象となる。しかし、ここでは事象はまだ表象なのである。

②再生産的記憶では、名前の理解が、直観や形象なしに事象を認識することになっている。たとえば、「ライオンという名前の場合には、わたしたちはライオンという動物の直観を必要とせず、また形象を

さえ必要としない。むしろ、わたしたちが名前を理解するということによって、名前は形象を欠いた単純な表象である。わたしたちが思考するのは名前においてである」(GW20, § 462, Anm.)。ここで、名前の理解は、名前における思考であることが明言されている。ここでの事象とは、名前と客観的に結合した意味である。客観的とは、心理学的にまず観念連合によって、個別が種に包摂され、つぎに論理的に選言推理によって、その種が類に包摂されていることを意味する。たとえば、個々のライオンの形象が、ライオンという種に観念連合によって包摂され、そのライオンという種が推理によって肉食動物という類に包摂され、草食動物や雑食動物から識別されているとき、ライオンという名前とその名前で表現されている内容は事象である。こうして、ライオンという事象を認識するとは、ライオンという言葉が類と種の関係において他の事象から識別することなのである。ここでの事象とは、普遍表象が推理によって客観化した存在という概念である。推理の成果たる「存在」が事象であることについて、『論理学』では「この存在はそれ自体で自立している事象 (Sache) であり、すなわち客観性なのである」(GW12, S. 126) とのべられている。そして、「この存在」が推理の成果であることについては、「推理の成果は、媒介を揚棄することによってもたらされた直接性であり、まさに媒介と同一的であり、かつまた概念であるところの存在である」(ibid.) とのべられている。また、事象が、選言推理の中項としては、「自分のもろもろの種へと分枝されている類」(GW12, S. 124) であるともいわれている。

③さらに、機械的記憶では、思考内容としての思想が生成し、名前は意味を揚棄する。ここにいわゆる「概念の自己運動」の場面が成立する。概念の自己運動という大袈裟に聞こえるが、わたしたちが母語を日常で話したり書いたりするとき、母語がつきからつぎに自己運動するようにならば機械的に発語されたり、表記されたりする。しかし、外国語を話したり書いたりする際には、客観的文法に従ってわたしたちが発語したり表記したりするところから始めなければならない。また、たとえば、神という言葉の内容は思想であり、形式は表象である。神は神、法は法というように、個々別々になっている。もっと進んだ段階でも、神は世界の創造者であるとか、神は全能であるとか、神は全知である等々の規定をばらばらに述定するにすぎない。多くの個々別々の単一規定が列挙されているにすぎない。反対に、思考では、形式も内容も思想に属する。たとえば、カントやヤコービの表現形式がある。さらに純粹思想としての概念とは、思考規定であり、思考そのものの形式を内容とする。たとえば、神についての思考は、神という名前から、「神は存在である」という命題をつくることによって、「存在は神の本質である」という命題に必然的に進む。その際、「存在」は思想としての事象であり、厳密には思考規定である。その場合、命題の当初の述語「存在」は命題の主語の類の本質を表現することによって、命題の表象としての主語を否定し、主語となる。こうして、「哲学の仕事は表象を思想に変えることにほかならないといえる。もちろん、哲学はたんなる思想をさらに概念に変えはするけれども」(GW20, § 20, A nm.)。表象命題が哲学命題となり、哲学命題が、弁証法による哲学体系となる。

(4) 述定によって主語は現実的知になる。

erst das Prädikat sagt, *was er ist*, ist seine Erfüllung und Bedeutung; der leere Anfang wird

nur in diesem Ende ein wirkliches Wissen.

述語によって、はじめて、神が何であるかが語られ、述語は神の内容と意味である。つまり、空虚なはじめは、この終わりにおいてのみ、現実的な知識になる。

《註解》『精神現象学』《第5節》(2)では、「哲学が学問の形式に近づくこと、いいかえれば、知に向かう愛という哲学名から脱却しえて、現実的な知になるという目標に哲学が近づくこと、この仕事に協力しようというのがわたしの目ざすところである」と語られていた。ここでの「現実的な知」とは、命題のことである。ここからわかることは、述語が主語の本質を表現する哲学命題が成立すれば、それを要素とする学の体系も成立することである。なぜならば、学の体系の思弁的叙述とは、命題自身の自己運動だからである。この点については、《第65節》では、「命題自身の弁証法的運動こそが現実的に思弁的なものであり、この運動の表現こそが思弁的叙述である」(Phän. S. 48)といわれている。

(5) また、純粹概念には意味のない音は本来不要である。

Insofern ist nicht abzusehen, warum nicht vom Ewigen, der moralischen Weltordnung usf. oder, wie die Alten taten, von reinen Begriffen, dem Sein, dem Einen usf., von dem, was die Bedeutung ist, allein gesprochen wird, ohne den *sinnlosen* Laut noch hinzuzufügen.

1 *sinnlosen*] sinnlosen

— このかぎりでは、なぜ人々は、永遠や道徳的世界秩序などについて、あるいは古代ギリシア人がしたように、存在や一といった純粹概念について、要するに、意味がある当のものについてだけ語ることにしておかないで、意味のない音をそこに付け加えるのか、察知されえない。

《註解》ここでは、(4)で、意味そのものとしての純粹概念である永遠、道徳的世界秩序そして一や存在から始まらないで、神という意味のない音としての表象から命題が始まるのが不可解に見えるといわれている。永遠ということでシェリングが、道徳的世界秩序ということでフィヒテが、そして、古代ギリシア人ということでプラトンやプロクロスを考えることもできるが特定されるわけではない。古代ギリシア人については、『精神現象学』《第71節》でこういわれている。「たとえば、プラトン哲学のすぐれた点がときおりプラトンの学問的には価値のない神話だとされる一方で、つぎのような時代もあったのである。その時代とは、熱狂の時代とすら呼ばれ、そのときには、アリストテレス哲学は、その思弁的深みのゆえに尊重され、おそらくは古代弁証法のもっとも偉大な芸術作品であるプラトンの『パルメニデス』篇が神的生命の本当の開示にして肯定的表現とされ、そして、忘我が産出したものがかなり濁っていてさえも、この誤解された忘我は実は純粹概念にほかならないとそのときはいわれた」。ここで、「プラトンの『パルメニデス』篇が神的生命の本当の開示にして肯定的表現」とは、プロクロス『神学綱要』のことと推察される。そして、純粹概念には、『パルメニデス』の一や存在のみならず新プラトン主義の忘我也含まれている。しかし、その後ベルリン期の『哲学史講義』では「プラトンは、純粹概念をあるがままのなまの姿で、それらが直接持っている以上の意味づけをすることなく扱っている。『一、多、存在』ということで直接の一や多をわたしたちは考える。わたしたちはそれらをわたしたち

の思考のうちにある普遍概念として扱ってよい。ところが、プロクロスにとってはそれがもっと高度な意味を持ち、絶対的実在の表現なのである」(M1, Bd. 3, S. 74)とされるようになっている。つまり、プロクロスでは、純粹概念が絶対実在の表現となっていると解釈されている。

ところで、純粹概念は、『精神現象学』では絶対概念とは区別されてつぎの五つの意味のいずれかで用いられている。①思考そのものの単純状態。これについては「思考そのものの単純状態とは自分自身を動かし区別する思想であり、固有の内面態、純粹概念だからである」(Phän. S. 42)といわれている。②弁証法的運動の場面。たとえば「弁証法的運動そのものについていえば、その場面は純粹概念であって、弁証法的運動は徹頭徹尾主体自体である内容を持っている」(Phän. S. 48)といわれている。③思考と自体存在の同一性。たとえば「そこにおいて単純な自己と自体、かの純粹な我と純粹な本質、思考が同一であるような純粹概念」(Phän. S. 342)といわれている。④もろもろのカテゴリー。たとえば「統一・区別・関係は純粹概念そのものである」(Phän. S. 242)といわれている。⑤本質。たとえば「万有引力、ないし、法則の純粹概念」(Phän. S. 106)といわれている。

まず、この純粹概念の本来の意味は、二つの側面に分けることができる。第一の側面は、思考の単純状態ないし弁証法的運動の場面という側面である。第二の側面は、この運動の結果として生ずる諸カテゴリーであり、これは意識の諸形態に対応する論理学の思考規定ないし規定された概念を指すといってよい。この側面に対しては、第一の側面は「純粹カテゴリー」としての〈思考と存在〉の同一性になる。してみれば、思考の単純状態としての純粹概念とはいかなるものであろうか。それは「自分自身を動かし区別する思想」(Phän. S. 42)といわれている。ここで「自分自身を動かし区別する」とは思考の単純状態がさまざまなカテゴリーへと弁証法的運動をとおして区別されてゆくことである。それに対して、思考の単純状態とはそのような区別がなされる前の単一な考えの内容をいう。つまり、思考が自己を思考するものとして考えたものそのものをいうのであり、絶対概念が、自己をとりわけ思考するという態度をとったものなのである。

なるほど、思考と存在の同一性やカテゴリーということは、絶対概念についてもいわれている。しかし、これは、純粹概念と絶対概念とがまったく同義であることを意味するものではない。この点については「[...] 否定的で純粹な洞察は絶対概念としてはもはや区別項ではない区別項を区別する働きである。その場合の区別項とは抽象態ないし純粹概念であり、それらは自分自身をもはやになうことなく、ただ運動の全体によってのみ維持され区別されるのである」(Phän. S. 379)といわれている。したがって、絶対概念は、能動的な区別の働きであり、それに対して、純粹概念は「もはや区別項でない区別項」であるという関係になる。そのことは、いまの引用文のつぎで「区別されないものを区別することの本領は、絶対概念が自分自身を己れの対象としていて、かの[区別の]運動に比して己れを本質として設定する」と説明されている。すなわち、純粹概念とは絶対概念としての主体・区別作用が自分〔本質〕を自分の対象〔運動の全体〕として区別したものなのである。

このようにして『論理学』へと向かう絶対概念がおのれを対象化したものがなおも純粹概念と呼ばれるのは、端的にいうならば、『精神現象学』の知の場では、絶対概念の能動主体が思考として捉えられ、

思考の思考というアリストテレスの見地が基礎にあるからである。逆にいうならば、アリストテレスの思考の思考という見地を前提してはじめて、ヘーゲルの絶対概念と純粹概念の区別が成立したといえることができる。

(6) しかるに「神」は主体表象の音にすぎない。

Aber durch dies Wort wird eben bezeichnet, daß nicht ein Sein oder Wesen oder Allgemeines überhaupt, sondern ein in sich Reflektiertes, ein Subjekt gesetzt ist.

しかし、この「神」という言葉によってまさに示されているのは、ここで設定されるものが、存在や本質体というような普遍的なもの一般ではなくて、自己へ還帰しているものであり、主体である、ということなのである。

《註解》ここで、存在や本質体という普遍実体と、自己へ還帰しているものとしての主体とが明確に区別されている。神を主語とする命題形式は、前者の普遍実体を示し、命題内容は、後者の主体を示している。命題形式において神は、意味のない音であるが、述語において神の意味が主体であることが表示されるのであり、体系において叙述されるのである。

(7) 命題形式における固定主語と述語の関係も外的である。

Allein zugleich ist dies nur antizipiert. Das Subjekt ist als fester Punkt angenommen, an den als ihren Halt die Prädikate geheftet sind, durch eine Bewegung, die dem von ihm Wissenden angehört und die auch nicht dafür angesehen wird, dem Punkte selbst anzugehören;

ところが、同時にこのことは予想されるだけである。〔右のような命題においては、〕主語は、固定した点のように考えられ、それが述語の支えになってさまざまな述語がくっつけられる。そして、〔述語をそこにくっつける〕運動は、固定した点について知る者の側に属することであって、その運動も当の固定した点そのものに属するとは考えられていない。

《註解》当該の文は、命題形式の説明をしている。命題形式は、思考主体と命題形式が分離されて、知の主体が、命題形式の主語を基体として固定し、それに属性内容としての述語をくっつける運動を行う。それに対して、哲学においては、命題の内容自身が命題形式を否定する。つまり、基体としての主語が自己を否定して主語の本質としての述語になる。前者は、『精神現象学』《第58節》以降における論弁的思考の肯定的態度と重なる。

(8) 述定運動は命題内容を主体として叙述する。

durch sie aber wäre allein der Inhalt als Subjekt dargestellt.

しかし、そうなれば、この運動のおかげで、内容こそが主体として叙述されることになる。

《註解》これは、間接話法第二式で表現されているので、仮想である。主語の自己運動ではない知る主観の運動によっては、命題内容は、主体として体系的に叙述されない。そのことが、つぎの(9)(10)で明

言されている。

(9) しかし、知る主観の運動は命題内容そのものに属さない。

In der Art, wie diese Bewegung beschaffen ist, kann sie ihm nicht angehören;
運動がここで考えられているような性質では、運動は内容そのものに属することができない。

《註解》 こうして、ヘーゲルは、内容そのものに属している弁証法的運動を主張する。

(10) 述定運動も命題内容に属していない。

aber nach Voraussetzung jenes Punkts kann sie auch nicht anders beschaffen, kann sie nur äußerlich sein.

ただし、例の固定した点が前提されているからには、運動は他の仕方ではありえず、外からのもの
しかありえない。

《註解》 命題内容としての運動よりも命題形式としての固定した点としての主語が優先され前提され
ると、運動は、命題の内容ではなくて主観の運動となって、述語を主語に外からくっつける運動になっ
てしまう。

(11) Subjekt は主体でもあり主語でもある。

Jene Antizipation, daß das Absolute Subjekt ist, ist daher nicht nur nicht die Wirklichkeit
dieses Begriffs, sondern macht sie sogar unmöglich;

したがって、絶対者は主体であることがいくら予想されていても、これでは主体という概念が現実的
になっていないばかりでなく、そのことが不可能にさえされている。

《註解》 ここで明らかに Subjekt は、命題内容における主体であると同時に命題形式における基体
つまり固定点としての主語なのである。命題内容よりも命題形式が優先され固定されてしまえば、命題
形式の自己否定によって命題内容へ移行することが不可能になってしまうのである。そして、その結果、
絶対者が体系となって現実化することもなくなってしまう。

(12) 主体は静止した点ではなくて自己運動である。

denn jene setzt ihn als ruhenden Punkt, diese aber ist die Selbstbewegung.

なぜなら、例の予想は主体概念を静止した点として立てるが、この概念の現実性は自己運動だからで
ある。

《註解》 (11)の例の予想では、命題形式にしたがって主体を静止した点という表象として立てることし
かできない。それに対して思弁的思考は、命題内容に従ってこの主体を自己運動として体系次元で実現
する。

《第24節》

【要旨】

学的体系とは概念の自己運動である。根本命題や原理は偽である。根本命題は反駁しやすい。普遍的なもの、原理、はじめとしての根本命題には欠陥がある。根本命題反駁は内在的展開である。反駁のためには肯定的側面の意識が必要である。自己否定は目的の実現と相補的である。はじめの実現は体系の根柢の反駁でもありうる。反駁とは、体系の根柢や原理が土台ではないことを示すことでもある。

(1) 学的体系だけが知の現実性である。

Unter mancherlei Folgerungen, die aus dem Gesagten fließen, kann diese herausgehoben werden, daß das Wissen nur als Wissenschaft oder als *System* wirklich ist und dargestellt werden kann;

3 kann;] kann.

上にのべたことから多くの帰結が出てくるが、そのうち、つぎの点に焦点をあてることができる。それは、知が現実的なものとして存在し、かつ叙述されうるのは、学として、いいかえれば体系としてだけである、ということである。

《註解》ヘーゲルによる体系の規定は、命題内容としての概念の自己運動ということなのである。このような体系知こそが知の現実状態である。

(2) 根本命題や原理は偽である。

daß ferner ein sogenannter Grundsatz oder Prinzip der Philosophie, wenn er wahr ist, schon darum auch falsch ist, insofern er nur als Grundsatz oder Prinzip ist.

1 er] es

2 insofern er nur als Grundsatz] weil er Grundsatz

それから、哲学において根本命題とか原理といわれるものは、それが真であっても、たんに根本命題や原理としてあるにすぎないかぎり、すでにこのことによって偽でもある、ということである。

《註解》ここでは、私の根本命題や意識の根本命題に対して批判がなされている。

(3) 根本命題は反駁しやすい。

— Es ist deswegen leicht, ihn zu widerlegen.

したがって、根本命題とされているものを反駁するのは、たやすいことである。

《註解》根本命題の根本性とはその命題を根拠づける命題を必要としないほど明晰判明な確実性を持っていることにある。したがってそれを反駁するということは明晰判明な確実性を否定することであり、

同等の確実性を持ちながら対立する命題を対置することである。これは懐疑主義の判断停止にほかならない。

(4) 普遍的なもの、原理、はじめとしての根本命題には欠陥がある。

Die Widerlegung besteht darin, daß sein Mangel aufgezeigt wird; mangelhaft aber ist er, weil er nur das Allgemeine oder Prinzip, der Anfang ist.

反駁とは、その欠陥を示してみせることである。ところが根本命題が欠陥をもっているのは、それがたんに普遍的であり、原理であり、はじめであるにすぎないからである。

《註解》 ここから、根本命題の反駁とは、はじめを展開させることとなる。したがってはじめは明証で確実な基礎ではなくて否定される。

(5) 根本命題反駁は内在的展開である。

Ist die Widerlegung gründlich, so ist sie aus ihm selbst genommen und entwickelt, — nicht durch entgegengesetzte Versicherungen und Einfälle von außen her bewerkstelligt.

そこで、反駁が根柢からのものであるのならば、それは、対立する断言や思いつきによって外部からなされるのではなく、当の根本命題そのものから取り出され展開されている。

《註解》 ここで、反駁とは反駁される根本命題の自己否定の展開であることが明言されている。

(6) 反駁のためには肯定的側面の意識が必要である。

Sie würde also eigentlich seine Entwicklung und somit die Ergänzung seiner Mangelhaftigkeit sein, wenn sie sich nicht darin verkennte, daß sie ihr *negatives* Tun allein beachtet und sich ihres Fortgangs und Resultates nicht auch nach seiner *positiven* Seite bewußt wird.

2 ihr *negatives* Tun] ihre negative Seite

3 und sich … bewußt] und ihres … bewußt

つまり、そうであるならば反駁は、本来その命題の展開であり、したがってその欠陥を補充するものだということになる。ただしそのためには、反駁が自分の本質を見誤り、自分の否定的なはたらきのみ注目することなく、自分の進行と結果との肯定的な側面をも意識しなければならない。

《註解》 ここには、命題の自己否定としての反駁と肯定的側面の意識としての反駁が指摘されている。後者は否定の否定である。正には自己否定がなく、反には否定の否定がない。合は正と反の統一ではなくて、反の自己否定なのである。

(7) 自己否定は目的の実現と相補的である。

— Die eigentliche *positive* Ausführung des Anfangs ist zugleich umgekehrt ebenso sehr ein

negatives Verhalten gegen ihn, nämlich gegen seine einseitige Form, erst *unmittelbar* oder *Zweck* zu sein.

—はじめを本来の意味で肯定的に実現してゆくことは、肯定的であると同様に反対にはじめに対して否定的な態度をとることでもある。すなわち、はじめが最初は直接的であり目的としてあるというその一面的な形式に対して否定的な態度をとることでもある。

《註解》 目的としてはじめは、まだ実現されていない非本来状態ということで自己を内側から否定する。自己否定は目的の実現と相補的である。

(8) はじめの実現は体系の根柢の反駁でもありうる。

Sie kann somit gleichfalls als Widerlegung desjenigen genommen werden, was den *Grund* des Systems ausmacht;

1 gleichfalls als] eben so sehr als die

だから、はじめを実現してゆくことが、そのまま、体系の根柢をなすものを反駁することとして受けとられうる。

《註解》 はじめを根本命題としての土台であると、ラインホルトのように考えると反駁は土台を崩すことになる。むしろ、はじめは目的であるから、反駁は目的の実現となる。

(9) 反駁とは、体系の根柢や原理が土台ではないことを示すことでもある。

richtiger aber ist sie als ein Aufzeigen anzusehen, daß der *Grund* oder das Prinzip des Systems in der Tat nur sein *Anfang* ist.

1 richtiger aber ist sie als ein Aufzeigen anzusehen,] besser ... Aufzeigen,

しかし、はじめの実現とは、より正しくは、体系の根柢や原理が実はただ体系のはじめにすぎないということを示すことと解されるべきである。

《註解》 体系のはじめは、不動の土台という仮象となる場合、反駁はこの仮象の否定を伴っている。

引用文献略号

GW: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (GWの後に巻数と頁数を記してある)

Phän.: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

M1: G. W. F. Hegels *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*. Hrsg. v. K. Michelet, Bd.1: Mit einem Vorwort von Karl Ludwig Michelet (1833); Bd.2 (1833); Bd.3 (1836), Berlin. In: G. W. F. Hegel: *Sämtliche Werke*. Jubiläumsausgabe in zwanzig Bänden. Hrsg. v. H. Glockner. 19. • 20. • 21. Bd., F. Frommann Verlag, Stuttgart/Bad Cannstatt 1965.